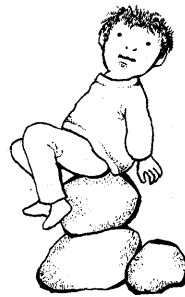


二十一世紀にむけて幼児教育を考える(1)

保育における

新と真を問う



森上 史朗

あと四年ほどで二十世紀は終ろうとしています
が、幼児や幼児教育にとっては今世紀はどのよう
な時代だったのでしょうか。倉橋惣三は一九一一

(明治四十四)年に雑誌『小学校』に寄稿した論
文の中で、二十世紀は「児童の世紀」と叫ばれる
趨勢の中で、それを喜ぶとともに、一方でその実

現を図るには数多くの困難があり、その打開に向
けて努力を重ねる必要があることを力説していま
す。

そこで倉橋が今世紀は「児童の世紀」であると
記したように、一九〇〇年にはエレン・ケイが
『児童の世紀』を著しており、その前年には、

デューイが進歩主義教育のバイブルとされた『学校と社会』を公刊しています。

一方、わが国では一九〇一年に女子高等師範助教兼幼稚園批評係であった東基吉らの手によって、本誌の前身である『婦人と子ども』が創刊されています。これは一九一二年には倉橋が編集主任を引き継ぎ、その後、『幼児教育』と改題されました（一九一九年）。彼はこの雑誌や日本幼稚園協会の講習会などを通じて、児童中心の保育を実現することに全力を注いだのです。

しかし、エレン・ケイ以降、内外における数多くの児童中心教育の提唱者たちの努力にもかかわらず、二十世紀が終ろうとしている現在においても、『児童の世紀』は十分に実を結んでいるとはいえない状況にあります。今、この瞬間にも民族紛争は絶えず、多くの子どもたちは傷つき、また飢餓の中にあります。わが国も経済大国、教育大

国を謳歌しながら、子どもから自然や遊び場は奪われ、人の心をつなぎ合わせるコミュニティーは崩壊し、親たちは孤立して子育てをすることを余儀なくされています。また、子どもたちは遊ぶ暇はなく、早期からの教育にかりたられる状況にあります。さらに、学校は競争の場となり、いじめ、自殺、不登校などの病理現象が進行しつつあります。

こうした現在の社会の状況をみると、今の状況をとらえた新しい『児童の世紀』、『児童中心の保育』を創り出す努力を始めなくてはならないと思ふのです。そのため、文部省では、『地域に開かれた新しい幼稚園の在り方』をさぐる先導的研究を各都道府県に委嘱して始めていますし、厚生省も現在の保育要求の多様化に即する特別保育対策に力を注いでいます。それは、幼稚園や保育園がこれまでの固定概念を固守したのでは、今の子

どもに即する保育を実現することにはならないという認識があるからでしょう。

しかし、こうした場合においても忘れてはならない重要な原則があります。それは、変わるものに目を向けながらも、その底にあって変わらぬ、子どもの本質”、保育の本質”が存在しているということを見逃さないことです。倉橋惣三の著作の中にもそのことについてふれた箇所が数多くあります。たとえば、『新しい新を怠ってはならぬが、古い新も忘れてはならぬ。』といって『世に新しきものあるなし』との古語にさとりを開いてしまうわけではないが、真に通ずる新は、古いものの中にあっても永遠の輝きを失わない』とか、「教育にそう新が得られるわけではない。千古永劫の真こそとうといのである」などがその例です。これからすると、現在、政府が進めている“エンゼルプラン”や“駅型保育”なども“保

育の真”との関連において検討されることが必要になる筈です。

私は現在、倉橋惣三が保育以外の分野の雑誌に執筆した論文を集めて、『倉橋惣三選集第五巻』（津守真監修・森上史朗編）を編集中です。それらの論文の多くは、明治から大正にかけて執筆されたものです。この選集のまえがきで、津守真氏は、「いま、この第五巻で、今世紀初頭の倉橋の主張を明瞭に読むことができる。それは今世紀前半に必要なことであつたし、この二十世紀の終わりにもまた必要なことである」と述べておられますが、真に通じる新を創造することが今、われわれに求められているといってもよいのではないでしょうか。

（日本女子大学）